



栄光と悲運に彩られた
伝説の名投手が眠る町

県の南部、平鹿郡の西部に位置し、町名の由来となった「雄物川」が町のほぼ中央部を貫流し、これをはさんで東は横手盆地の一部をなす肥沃で平坦な水田地帯。西は出羽丘陵に連なる山間地帯で、県内有数の穀倉地帯と呼ぶにふさわしい豊かな風景が広がっています。

この雄物川町今宿の崇念寺に、野球ボールの形の石が乗った風変わりな墓があります。ロシア出身で日本プロ野球往年の名投手、ヴィクトル・スタルヒン（1916年〜57年）の墓です。

この名投手を陰から支えたのが、昭和25年に結婚した妻の久仁恵さんで、崇念寺が実家であり、住職の高橋大我さ

んの姉にあたることから、スタルヒンは妻とともにこの地に永眠することとなりました。スタルヒンは、大正8年3歳の時にロシア革命のありを受けて日本に亡命。昭和9年、結成されたばかりの大日本野球倶楽部（巨人軍の前身）に17歳で入団し、史上に残る



トンボユニオンズ在籍時に300勝達成

県内随一の「松茸の里」

伝説の名投手のゆかりの地

（秋田県平鹿郡・雄物川町）

大活躍を見せます。

巨人には、戦争悪化で一時中断する昭和19年まで在籍しましたが、戦渦ではいかにも語呂で付けたとしか思えない須田博に改名させられ登板助膜炎で倒れ、失意のなか巨人軍からも追放されました。

更に敵性外国人として軽井沢抑留され、奴隷のように扱われるなど幾多の困難を克服し、戦後にプロ野球に復帰、弱小球団を転々としながらも史上初の300勝投手となりました。

しかし、昭和32年不慮の事故のため、40歳の若さでこの世を去ることとなります。

303勝は歴代6位であり



ますが、戦争による試合数の減少や休止等なければ新たな伝説が生まれていたのは云々までもありません。

ゆかりの地として、街の活性化に繋げる

現在の墓は平成元年にスタルヒンの33回忌の命日に夫妻の長女であるナターシャさんが建立したもので、野球のボールを模った墓には、毎年野球関係者や大投手の生き方に感銘したファンなど多くの参拝者が訪れています。

地元商店街では、この伝説の名投手スタルヒンに注目し、町おこしに力を入れており、

これまでスタルヒン写真展の開催や、地元食堂ではスタルヒンをイメージした焼きそばも登場、話題を集めています。

この10月20日には、町商工会などが主催し、スタルヒンの長女で栄養学の専門家でもあるナターシャさんを招いて「女性の健康管理とダイエット」と題し

ての講演会を開催しました。町では、今後とも街の活性化に繋げるために、偉大な名投手のゆかりの地としてこのような取組みを支援していくこととしています。

県内随一を誇る

「松茸の里」雄物川

江戸後期の紀行家・随筆家である菅江真澄が編纂した秋田の地誌「雪の出羽路」に、当時の秋田藩主佐竹義和公にこの地で採れた松茸を献上した一説が明記されるなど、いにしえよりこの地は松茸の産地として、味、香り、量ともに県内随一を誇り、町の特産品となっております。

9月下旬から10月下旬の松茸の時期には、国民保養センター「三吉山荘」や雄物川温泉「えがおの丘」をはじめ町内のほとんどの料理店で松茸が食べられます。料理方法も店によって様々で、古くから松茸の食文化が受け継がれてきたのです。

懐と時間に余裕のある方は食べ比べ、香り比べしてみるのも贅沢の一つです。



また、10月の体育の日には「まつたけマラソン大会」が開催され、県内外からマラソン愛好者が参加。賞品である豪華松茸を目指して競います。出場者全員には松茸ごはんが振舞われます。

雄物川町産の松茸は他とは違つて、カサが開いてから収穫するのが特徴で、これにより味・香り・風味が一段と増すと云います。

名産地としてかつての賑わいを取戻す取組み

近年町では、この特産の松茸が採れなくなつて来ているのが現状です。原因としては赤松の木の老木

化、自生地の環境悪化、松くい虫被害等が上げられます。町では、以前採れていた山を試験地として買上げ、かつての賑わいを取戻すべく、松茸の発生環境整備や赤松の更新に努め、松茸の増産に向け取組んでいます。



まつたけマラソン大会